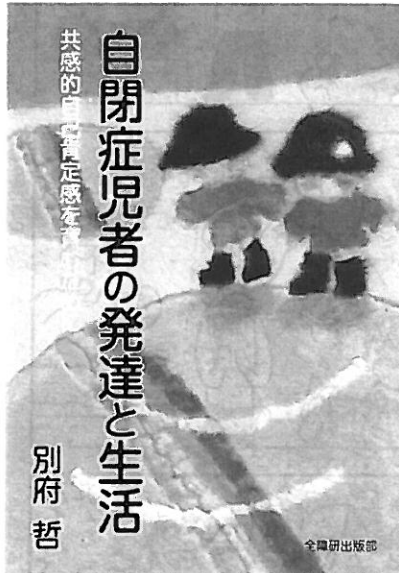




自閉症児者の発達と生活

共感的自己肯定感を育むために



著者 別府 哲

出版社 全障研出版部

(TEL 03-5285-2601 FAX 03-5285-2603)

A5判・144頁・定価 1,680円

「共感的自己肯定感」をキーワードに自閉症児者の支援についての原点を気づかせてくれる1冊である。

自閉症児者への支援は、一人の内面に共感しつつ「自分は自分であっていい」と自身をかけがえのなさを生きる力として実感できるように支援することであり、そのために、関わる人も「共感的自己肯定感」を感じることができるよう支えることも大切であるとする。しかし、昨今の風潮は自閉症児者を「人格をもった一人の主體的に生きる存在」ととらえる。この一見あたりまえのことが障害理解の広まりの中で逆に軽んじられるようになっていないでしょうか」と、自閉症を障害特性としてのみ理解し、共感的に寄り添うこともなく方法論だけが先行していると警鐘をならす。

共感的自己肯定感を育むためには、自閉症児者が「他者とつながる経験」を作りにくいという困難性の中で「自分で自分の気持ちに気づき」「今、ここにいる自分」「誇らしい自分」「必要とされている自分」を実感することが大切であるが、現代の新自由主義に基づく競争

原理は「家族や学校に“間”を持ちにくい状況を作り出している」と、育むためのゆとりを失わせているとも指摘する。

本書を読み進むにつれ、主体者としての彼らに寄り添い、その想いを感じ、耳を傾け、結果をあせらず、遠回りしながら、見守り、「間」を大切に、待つ姿勢をもって関わるこそが、主体的な人生を保障することになるとの視点が明らかにされ、臨床現場には、競争原理に基づく効率性や合理性を持ち込むべきではなく、ゆとりこそが必要であることをあらためて気づかされる。

最後に、共感的自己肯定感を育む実践は、結果として“異質”なものを排除するのではなく“共同”の社会を形成するものであると、私たち支援者へ実践の先を示す。

私たちの日々の支援へのヒントもたくさん教えられ本書の一読をぜひお勧めしたい。

評者：阪口光男（編集出版企画委員会委員）